

くらし ニア

夕映えのとき

人生90年時代

春日キヌコ

< 3 >

「終活」という言葉を近頃よく目にする。新聞にも次のような投書が載っていた。

「63歳の夫が還暦を過ぎた頃から「終活」を始めた。身辺整理はまだまだだけど、預金や保険の情報を4人の子ともたちに伝え、とりあえず「もしも」の時の準備を整えた。」

辞典には、終活とは「人生の終わりのための活動の略」とある。確かに、還暦や定年など人生の節目に、預金や保険の整理、葬儀や墓について考えることは大事なことである。

しかし、「終活」として何をするかは、「人生90年」を想定するか否かで大きく異なってくる。

私ほこれまで支援の現場で「子どもに先立たれた想定外の人生になった」と語る高齢者に、数多く

60代からの「終活」

人間関係日々培い拓く



絵・トワフクロ

安心・安全
結ぶプロジェクト

ど、また子ども数2人以上の人が6割以上を占める昭和生まれ世代は、子どもさんの明治・大正生まれ世代より、「逆縁」の境遇に陥るリスクは高くなる。

そうした時代に最も重要な「終活」とは何だろうか。

私が属する団体で、認知症になった「おひとりさま」を支えるための方策を探る聞き取り調査を

した。その中で「なるほど！」と気付いたことがある。

当たり前と言えは当たり前のことだが、人間関係が豊かな人は認知症に

なっても、在宅生活を続けやすい。周囲の人の支えがあり、初期の発見、早期の受診ができるからだ。

一方、つながりが薄い人は、認知症がかなり進んでから発見される傾向にある。周囲の支えが弱く、在宅生活の継続も困難になりがちだ。

人とながる力は、一朝一夕に培われるものではない。こう考えると、体力・気力がある60代、70代に自覚してなすべき「終活」とは、家に閉じこもらず、家族以外の人との人間関係を日々培い拓いていく活動といえるだろう。

(臨床社会学者 廿日市市)